

# 昭和 SPレコードで迎れば

## 玉碎山崎部隊

### S Pレコード収集家 ■ 城内 實

キング改め富士音盤からは、同年八月に時雨音羽作詩、佐藤長助作曲、樋口静雄の歌で「玉碎山崎部隊」が発売された（B面は「嗚呼山崎部隊長」）。こちらは歌詩の中身に比べて曲は意外と軽快である。

#### (一)

今から六十年ほど前の昭和十八年五月二十九日、山崎保代大佐率いるアツツ島の北海守備隊（第二地区隊）が玉碎した。この悲報は当時の我が国の政府関係者及び世論を震撼させた。山本五十六連合艦隊司令長官がソロモン群島ブイン上空で壮烈な死を遂げた直後の玉碎でもあつただけに、昭和十七年前半頃までの相次ぐ皇軍の大戦果で昂揚した戦勝気分は急に影を潜め、大東亜戦争は一転して悲壮感、緊張感を帯びるようになつた。

れた。その代表格ともいえるのが朝日新聞が歌詩を一般公募し、同年九月に日本コロムビア改めニッヂクから発売された「アツツ島血戦勇士顕彰国民歌」であった。この曲は伊丹市の高等女学校教諭の裏巣久信の詩に山田耕筰が曲をつけ、当時ラジオで頻繁に放送されたものである。

波平暁男、伊藤久男、伊藤武雄が以下の歌詩を悲壮感をこめて歌つている。

刃も凍る 北海の  
御楯と立ちて二千余士  
精銳こそる アツツ島

血戦死闘 十八夜  
烈々の士氣 天を衝き  
敵六千は 屠れども  
吾また多く 哀えり

一兵の援 一弾の  
補給を乞わず 敵情を  
電波に託す 二千キロ  
波頭に映る 星寒し

時は五月の十二日  
突如と起る歎声は  
多勢を頼む敵部隊  
南と北と東より

残れる勇士 百有余  
遙かに皇居 伏し拝み  
敢然闘と 諸共に  
敵主力へと 玉碎す

雲霞の如く押し寄せる  
白夜に濃霧立ちこめし  
二十九日の夜の空

はるかに皇居伏し拝み  
敵陣深く切り込みて  
無念や玉と碎けたり

一番、二番、六番の歌詩を紹介する。

一番、二番、六番の歌詩を紹介する。

#### (二)

当時のレコード界においてもこの山崎部隊の玉碎が題材となり、何枚かのレコードが発売さ

時これ 五月十二日  
暁こむる 霧深く  
突如と襲う 敵二万  
南に邀え 北に撃つ

ああ皇軍の 神體に  
久遠の大義 生かしたる  
忠魂あと うけ継ぎて  
撃ちてし止まん 魂の仇

(筆者の音盤からの聴き取り)

(四)

この他にも日本ビクターから昭和十九年一月新譜として「壮烈山崎軍神部隊」と裏面に和田信賢アナウンサーの朗読「アツツ島玉碎」を吹き込んだ音盤が発売された。こちらの方は残念ながら筆者未所有の盤である。二番及び三番の歌詩を紹介する。

アツツの島を守りたる  
忠烈無比のつわものは  
敵を支へて十八日  
弾丸今はうちつくす

これまでなりと突撃の  
最後の命の下る時  
傷病兵はそれぞれに  
七生報國誓ひつつ  
自決し果てし潔さ

以上とりあげた三曲の歌詩から山崎部隊の敢闘振りが伺われるよう。

(五)

ユーシヤン列島のアツツ島は、アラスカ半島から連なるアリ

昭和十八年に入ると米国の反攻を受け、同年五月十二日の未明、ついに敵機がアツツ島に来襲し、上空から勧降文を撒布した。その数時間後、米軍は猛烈な艦砲射撃を守備隊に加えると同時に、同島に上陸した。敵の艦艇は三十隻にのぼり、周辺の制空海権を掌握して守備隊の十倍の軍勢をもって進撃してきた。

二十九日、海軍系の無線を利

用し、第二地区隊守備隊長山崎大佐は北方軍司令官樋口季一郎中将に対して凄烈なる報告を行

つた。「地区隊は二十九日、残存兵力一丸となり、敵集団地点に向い最後の突撃を敢行し、之を殲滅、皇軍の真価を發揮せんとす。傷病者は最後の覚悟を極め处置す。非戦闘員は攻撃隊と共に突進し生きて捕虜の辱しめを受けざるやう覺悟せしめたり。」同日午後九時三十分、「従来の懇請を深謝すると共に閣下の健勝を祈念す」の無電を最後にアツツ島からの連絡は途絶えた。

山崎大佐以下百五十名は三十



(六)

日夜半過ぎに敵中に決死突入し、各所の敵陣地を混乱に陥れたことが敵無線の傍受によつて確認されている。

この敢闘精神に対し、天皇陛下からは二十九日に再度御嘉賞の御言葉を賜り、参謀総長及び陸軍大臣名で「今や最後の鬪頭に立ち、毅然たる決意と堂々たる部署の報に接し合掌して感謝す。必ずや諸氏の仇を復し、アツツ島の守備隊（第一地区隊）はアツツ島玉碎後、濃霧を利用して撤収作戦に成功し、米軍はそのままキスカ島が無人島となつたことを知らず爆撃、艦砲射撃を加えたのであつた。

筆者をはじめ戦後を生きる我々日本人の使命は、物量で皇軍を遙かに凌ぐ米軍勢に対し、臆することなく最後まで戦つたアツツの英靈たちの敢闘精神に思いを馳せ、このふがいない我が國の現状を打破することではあるまい。最近の内外情勢の推移を見るにつけ、つくづくそう感じるのであつた。

(了)